

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 研究主題に対する基本的な考え方

##### (1) 「活動する喜びをあじわう」とは

子供は、必要感をもとに意欲的に取り組んでいるとき、適度な学習への抵抗感をもち、それを自力で乗り越えていくと学習の喜びも大きくなるのである。このように喜びを体験的に得ることによって、子供には、さらに、自ら学ぼうとする意欲が育ち、転移できる学力が期待できるようになるのである。

生活科において、体験的な活動を通して喜びをあじわうとは、子供が楽しく生き生きと活動するということである。それは見た目に動き回っていけばよいというものではなく、一人一人が思いや願いをもとに、進んで学習対象にかかわりながら、その思いや願いを実現していくところに活動する喜びを感じるのである。

生活科のアンケートの中で、一人一人の子供が生き生きと活動している場として、次のような姿がとらえられた。

- 活動内容に興味・関心があるとき
- 活動の中に感動や気付きがあったとき
- 自分なりのめあてが見つけれられたとき
- 五感や体全体を活発に駆使して活動しているとき
- 自分の考えや活動が認められたとき
- 未知の体験に取り組んでいるとき
- 自分のよさや成長に気付き、活動に自信が見えるとき

これらの子供の姿は、活動する喜びをあじわうきっかけともなる様相であり、教師がどのような活動の場や支援を構成していけばよいか授業づくりにおいて肝要である。

生活科においては、子供に何をさせるかというよりも、子供が何をしたいと思願っているのかを重視し、何ができたかという結果よりも、何をしようとしたかという過程を大切にす教師の基本的姿勢が大切である。そして、一人一人の活動を継続・発展していくことで、子供は活動する喜びをあじわうことを実感できるのである。

第1学年単元「いろみずであそぼう」を例に、子供の具体的な姿をとらえてみる。子供たちは、春からアサガオを育ててきた。種まき、水かけ、肥料やりなどの一連の活動を通す中で「きれいな花がさくといいな。」という思いが生まれる。この思いは、いつしかきれいな花が咲くと「この花をとっておきたいな。」という思いへと広がる。そこで、押し花づくりや色水づくりへと発展していくのである。子供は、色水づくりを通して、「赤い花からは、赤いしるがでたよ。」「青い花からは、青いしるがでたよ。」という気付きが生まれ、活動する楽しさをあじわっていくのである。さらに、この色水づくりは、身近な自然に咲く花や草花にも発展し、「あの草からは、緑色のしるが…」「この黄色のしるは、あの空き地にあったタンポポのだよ。」などと地域の環境に積極的にかかわっていく姿が生まれてくる。

このように、子供の思いや願いを大切にした活動を構成し支援していくことで、活動する喜びをあじわうことができると考える。

##### (2) 「自ら問いかけ、解決していく力」とは

生活科では、問題解決の習慣を、子供の具体的な活動や体験を通した生活の中から身に付

けることができるようにすることをねらいとしている。それは、低学年の子供の実態として次のようなことによる。

- 子供は、自分の発想で「してみる」という視野の中にしか問題を見いださない。
- 子供は、積極的に「しよう」という過程の中にしか問題をもたない。
- 子供は、ねらいをもたないと問題を意識しにくい。

子供は、「しよう」と思っているねらいに向かうところに「はばまれる」という抵抗が生じると、そこに「なぜだろう。」「どうして。」と問いが生まれ、「こうしたら解決できるのではないか。」と問いかけが始まり、自分なりに切り開いていこうとする。これが「自ら問いかけ、解決していく力」となる。

すなわち、問題を解決する問いは、他からの問いではなく、自分自身が解決したいとする、子供の内的欲求から生まれてくるものである。そこで自ら問いかける子供の姿は、主体的かつ意欲的な姿である。自らの問いに対して「こうすれば。」「こうかもしれない。」といった、自分なりの発想による小さな解決から進んでいくと、つまずきに出会う。教師の支援等によりこのつまずきを克服すると、さらに新たな問いが生まれる。この繰り返しによって問題を解決する力が育つと考える。

しかし、問題をもち、解決していくときに、その発端が大切となる。「まず、自分でしてみる。」「思うようにいかない。どうしてかな。」と、子供自身に疑問が芽生えるようなものでなければならぬ。そのためには、子供が「してみよう。」「やりたいな。」と思うようになる活動のきっかけをつかめるようにすることが大事である。一人一人の子供が、興味・関心を寄せ、自分なりの思いを寄せる活動のきっかけは、学習の場とのかかわりが大きい。

生活科は、子供の生活圏すべてが活動の場である。子供が作ったり、遊んだりするような様様な活動を促すもとは、作りたい、遊びたいと自ら要求するような場に出会うことである。したがって、子供が夢中になって取り組むことのできる環境構成や環境作りが重要になってくる。

また、子供のつまずきに対する教師の支援の仕方も、「自ら問いかけ、解決していく力」を育てるうえで重要である。一人一人の子供が、自分で問題を解決しようと試行錯誤しながら活動するのを見守り、子供が自らすることを認め、励ましていく支援が求められる。しかし、自ら解決することをねらうあまりに、待ち過ぎて子供の手に残り意欲をそこなわせたり、引き出すことが少なかったりすると、解決の成就感が乏しく、新たな問いが生まれず、中途半端な活動に終わってしまう。つまずきの度合いによって支援の仕方を変えていく必要がある。

子供にとって、問題が本当に自分のものになっているときは、今までの自分の経験をもとにいろいろと解決の方法を考え、試みるものである。子供が自分の力で問題を見だし、「こうしてみよう。」「ああしてみよう。」と、自らの力で発想し、考える習慣を身に付けることが、これからの社会の変化にたくましく対応し、生きて働く自己教育力につながるのである。

## 2 研究主題にかかわる意識・実態調査

研究主題の基本的な考え方にに基づき、生活科指導上の諸問題などの実態を調査・把握するため、県内小学校生活科担当教員8校51人を対象に、平成5年1月8日から1月18日までの期間でアンケート調査を実施した。